



大藏流狂言師  
善竹 富太郎 さんに聞く

聞き手 外川 智恵さん ● 大正大学表現学部准教授

ぜんちく・とみたるう  
1979年8月10日生まれ、  
学習院大学文学部心理学科  
卒。祖父・故善竹圭五郎、  
父・善竹十郎に師事。3歳  
で稽古を始め、5歳の時に  
狂言「鞍轡」（うつぼざり）  
の小猿役で初舞台を踏む。現  
在は自主公演「深谷の夜の  
狂言会」「銀座の夜の狂言会」  
「狂言道場」「SORORI」  
などを主催して狂言を広め  
る活動も行っている。桐朋  
学園短期大学演劇科、昭和  
音楽大学短期大学「ミュージ  
カル学科」の講師。

**狂言とは、室町時代から650年続く  
伝統あるお笑い演劇**

**外川** 本日は、大藏流狂言師の善竹富太郎さんの稽古場におじゃまして、お話を伺います。

最初に、「狂言とは、いったい何か」というところからお聞かせいただけますか。

**善竹** ひとことと言いますと、「室町時代から650年以上の歴史を誇る日本のコメディ」です。伝統のあるお笑い演劇、という感じですね。

**外川** 「笑い」といえども格式を感じます。他の伝統芸能との違いはありますか。

**善竹** 能との違いを、よく質問されます。能も室町時代から続いているのですが、能と狂言を合わせて能楽という芸能になり、演じるのは能楽堂という劇場です。

能は面を付けて、「これはこの辺りの……」とやるわけです。どちらかというと緊張感のある、死者を弔うようなお話が多いので

す。狂言も面を付けることがあります、多くは素顔で、しかも2人以上で演じる会話劇が多いという違いがあります。

緊張感のある能と笑いの狂言を上演する、すなわち緊張と緩和のバランスがとれた芸能が能楽なんです。能と狂言は兄弟のようなものと思っただければいいのではないのでしょうか。

室町時代に始まった能楽に対して、歌舞伎や落語は江戸時代という違いがあります。

**外川** 能と狂言には緊張と緩和という意味合いがあったのです。陰と陽、表裏一体というか……。ちなみに、能と狂言では、演者も違うのです。

**善竹** 完全分業制です。私は大藏流狂言師と名乗っていますが、正式名称は能楽師大藏流狂言方。能は5流あって、観世、宝生、金春、金剛、喜多。一方、狂言は2流で、和泉流と大藏流となります。能の面を付けて主役を演じる人はシテ方、それからワキ方、囃子方などと分かれ、囃子も大鼓、小

鼓、笛、太鼓を各家の人が奏します。これが家単位で、代々続いています。

**外川** では、善竹さんも、生まれながらにして狂言の道に入ることが決まっていたのです。

**善竹** その通りです。

**外川** ある意味、その宿命をすんなり受け入れられた。

**善竹** 父と祖父が、私をうまく狂言の道に仕向けていったような感じ。いやではなかったかと、よく聞かれることがあります。



すが、そのように感じたことはありません。小学生の頃は、ほかの子は学校から帰って野球やサッカーで遊ぶところを、私は一度家に帰り、稽古をしてからみんなと合流して遊んでいました。

**外川** 何かを犠牲にしてお稽古をしていたわけではなかったのです。

**善竹** ええ。学校を休んでも稽古をしなさい、舞台に出なさいという家もありました。父や祖父の考えは学校優先でした。私は中学・高校ではバスケットボール部のキャプテンでしたし、学習院大学では心理学を専攻しましたが、ほかの学生と同じように通っていました。ちなみに、能楽師は学習院出身者が多いようです。

**狂言のテーマである「笑い」と「人間」について、詳しく知りたかった**

**外川** 大学では、なぜ心理学をお選びになったのですか。

**善竹** 狂言には主人と召使いといった主従

善竹 富太郎さん



関係をはじめ、いろいろな人間関係が出てきますが、「笑い」がありながらも人間の根源とか内面をえぐったようなストーリーが多く、日本人の心を表現した最たるものだと思います。そうした狂言のテーマである「笑い」と「人間」について、もっと詳しく知りたいと思いました。

**外川** 例えば狂言では、人間関係や心理がどのように描かれているのでしょうか。

**善竹** 例えば、「附子<sup>ぶす</sup>」という狂言があります。一休さんの水あめの話と聞くと、覚えている人が多いかもしれませんが、

主人が外出する前に、2人の召使いを呼

んで桶を置きます。その中には、主人が夜な夜な楽しんでいるものが入っているのですが、「これは附子という猛毒だから、留守中に近付いてはいけない」と申し渡します。しかし、2人の召使いは毒だと言われると気になってしかたがない。ちよつと見るだけならいいだろうと恐る恐るのぞき込んでみると、うまそうに見える。次はちよつとだけ味見をしてみようとなめたところ、それはとても甘い砂糖だった。ご主人様は嘘をついていたと腹を立てて全部食べてしまいます。我に返って言い訳を考えたあげく、主人が大切にしている掛け軸を破り、天目茶碗を割って、大声で泣いているところに主人が帰宅します。そこで、2人で相撲を取っていたら掛け軸と天目茶碗を壊してしまったので、死んでお詫びをしようと、毒である附子を食べたと言いつくします。最後は謡になって、一口食べても死ねない、なぜ死ねないのかと言いながら逃げていくというお話です。

これだけでも、独り占めしてしまう心理や禁止されるとやりたくなる心理、それぞれ全員が嘘をついてしまう心理など、いろいろなが入っています。

### そもそも人間は滑稽なのか 人生には笑いが必要なのか

**外川** 狂言は人間の性のようなものを表現していて、そこに笑いがあるというお話はとてもおもしろいですね。つまり、人間が滑稽なのでしょう。それとも、人生には笑いが必要だからでしょうか。

**善竹** 笑いが必要なのだと思います。例えば、昔はご主人様や大名が失敗する姿を笑うなどということは、あり得なかったわけです。「無礼者！」と。しかも、狂言を見ているのが將軍様だったりすることもある。だから、上の位の人の失敗をテーマにするためには、笑いでくるむしかなかったのだと思います。

大名が失敗をする狂言は、たくさんあり

ます。それも、大失敗してそのままというストーリーの場合、大名は最初に「これはいずれのご存じの者でござる」と名乗ります。私は皆さんがご存じの者ですよ、この格好を見れば分かるでしょう、というわけ。

**外川** 大名と言わずに？

**善竹** ええ、自分でははっきり言わない。

それが中程度の失敗の場合は「遠国おんごくに隠れもない大名」、遠くの国に隠れもない大名ですと名乗ります。小さい失敗、つまり最初は失敗しても最後には逆転する、例えば「蚊相撲」という狂言がありますが、そういう場合は「この辺りに隠れもない大名」と名乗ります。

**外川** 面白い！ 当時の社会的ヒエラルキーに配慮しているんですね。

**演者自身が解説してから狂言を見ていただくスタイルが増えてきた**

**外川** 稽古は、いくつの頃にお始めになりましたか。

**善竹** 私の家では、だいたい3歳で稽古を始め、5歳で初舞台です。最初は謡だったでしょうか。

われわれの稽古は伝承といいますが、父の言うことを全部まねて言う。稽古場で、まず父に教えてもらって、祖父は仕上げという感じでした。自分の個性は関係ない。もちろん、何も考えずにまねだけしているわけではありませんが、個性の表現などというものは大人になってからの話です。

周りの方々から、富太郎さんのその面白い感じはお父様譲りですねと、よく言われます。しかし私は父のように演じようと思いついては、自然にそういう流れになったのでしょう。私の曾祖父は狂言界で初めて人間国宝になった善竹弥五郎であり、その五男が祖父の圭五郎、父の十郎、私の弟が大二郎となりますが、この東京善竹家という流れがあることが大事です。

**外川** 代々受け継がれてきたものを受け継ぐご負担は感じますか。

**善竹** こういう家に生まれたのは、ラッキーだったと思っています。

能を演じるにはある程度の人数が必要ですが、狂言は2人いればできる演目もあります。いろいろなイベントなどにお笑い芸人さんが出演なさいますが、狂言を呼んでいただければ、例え一人でも「お笑い」にプラスして「伝統」も楽しめますよ。

**外川** 伝統芸能を受け継いでいる善竹さんは、今の笑いをどうご覧になっていますか。

**善竹** テレビのお笑い番組はよく見ます。ただし、視聴者としてではなく、笑いを提供するという同じ側の観点から見えます。



外川 智恵さん

今の時代、狂言では、演者自身が解説してから狂言を見ていただくというスタイルが増えてきました。「附子」という狂言が私が増えるのと、父や人間国宝が演じるのではそれぞれ味わいが違いますが、初めて見る人にはその違いが分かりません。そこで大事になってくるのが最初の解説トークであり、トークの展開方法をいろいろなお笑い番組を見て研究しています。

解説のトークをするときは、落語の枕のようなイメージで話しています。私はジャズを歌ったりオペラの方と共演したりしますので、「落語の枕」にジャズのMC（司会進行）の「落ち着き」や「上品さ」を足したようなイメージです。

**外川** なぜ外国の文化であるジャズを。

**善竹** もともと歌が好きで、大学時代にギターの人と組んで、メジャーデビュー寸前までいったことがあります。しかし我流だったので、先生について教わって、それがオペラにまでつながりました。

イタリアには、現代のオペラの元になったバロックオペラというものがありませんが、東京二期会のソプラノの歌手と一緒に「狂言オペラ」を渋谷やフランス、スイスで上演したこともあります。バロックオペラは、狂言の動きに合うんですよ。

いずれにしろ、芸のレベルを上げていくのは自分の問題ですが、狂言が生まれた室町時代と現代では650年も離れているので、どうやってお客様に分かりやすく見ていただくかを常に意識しています。

### 福の神が「楽しくなるためには元手がいるんだよ」と

**外川** 狂言を通して現代人、特に若い人に伝えたいことはございますか。

**善竹** 狂言の会話の中に、「相手への配慮」「フォーユーの精神」があることを感じとっていただけとうれいしですね。例えば旅行をするときも、「まず、こなたからございれ、つまり「あなたから行ってください」

と。「あなたからお先にどうぞ」の精神が、どの狂言にも出てきます。

**外川** 「あなたから」の精神で接するためにどのような努力が必要ですか。

**善竹** 「福の神」という狂言では、それは常々の心の持ちようである、常に意識することが大事だといっています。

参詣人が神社で「楽しくなりたい」と祈ると、福の神が出てきて「楽しくなるためには、元手がいるんだよ」と。参詣人は驚いて「ご冗談でしょう。それがないから、こうして神様にお願しているのです」、すると「元手とはお金のことではない。常々の心の持ちようだ」。ではどんな持ちようかというのを最後の舞いで表現するのですが、早起きをする、夫婦喧嘩をしない、来客を快く迎える、福の神に御神酒を供える、そうすれば日々楽しく過ごせる、と。

私は、「ありがとうございます」と感謝する精神が大事ではないかと思えます。

**外川** 先ほど、お稽古はお父様のまねから



始まったとおっしゃいましたが、そういった「フォーユーの精神」も、まねていくところから始まったのかもしれないね。

**善竹** そう思います。無意識のうちに、父や祖父をお手本にしていたのだと思います。

**もう一度見に行こうと思って  
いただけるかどうか勝負**

**外川** 現代に受け継がれている日本の伝統文化には、どんな思いがありますか。

**善竹** 今年は特に歌舞伎にご縁があつて、松本幸四郎さんの襲名記念や坂東玉三郎さんの舞台など、3カ月連続で歌舞伎座に通いましたが、本当に面白いですね。玉三郎さんのしぐさは、もう一から十まで全部かわいい。女性の美しい動きを、とことん研究なさったのでしょうか。あれは必見です。

狂言には、これと対照的な女性がよく登場します。狂言も歌舞伎のように女性の役を男性が演じますが、化粧はしないし髪型もこのまま。私なんか、モヒカン刈りの頭

でNHKの番組に出たことがあったほどです。頭に美男びなんという白い布をまいて着流しで登場したら女性であるという狂言独特の決まり事がありますが、たくましくして騒々しい「わわしい女」がよく出てきますね。

**外川** 私にとつて、狂言はどこか遠い世界に感じます。狂言師も日常であまりお目にかかる存在ではありません。ご自身ではどのようにお感じになっていらっしゃいますか。

**善竹** そこがわれわれのうれしいところで、初対面の方に「狂言師です」と自己紹介すると、「狂言師の方と初めてお会いしました。ありがとうございます」とおっしゃっていただけ。1回は見に行こうかなと思っていただけ。プラスのイメージでスタートできるということはあります。

**外川** たしかに！ 今日はとても貴重な機会だと思つて嬉しかったです。

**善竹** しかし、大事なはそのあとです。プラスの気持ちでお話しして、狂言を見に来ていただいて、一度見て満足して終わり



というのではなく、面白いからもう一度見に行こうと思っただけなのかどうかが勝負だと思っています。

**外川** 次へつなげる努力があるのですね。決め手は。

**善竹** 解説であり、トークです。いろいろな方にお話をうかがうと、「そういうえば、学校の時に狂言を見たことがある」とおっしゃることが多い。「行かされた」「見せられた」といった感じですよ。

**外川** 強要されたような思いはマイナスに

働きそうですよね。

**善竹** ええ。それでは良くないと思って、狂言には繰り返しのところが多いのでそこをカットしたりして工夫しています。面白いトークは難しいですが、面白みの中にアカデミックな内容も盛り込む、そのバランスに注意しています。

**外川** 今日のお話も、笑いだけではなく教養も含まれていて豊かでしたね。

### 180曲の最後に習う「釣狐」を30代最後の年に上演

**善竹** 私は若い頃に、父がお客様に解説しているのを舞台袖で聞いていて、全部メモしました。その日の天気やお客様の層から、父が話す内容、それに対する客席の反応など、自分なりに解釈し、整理して、あとで見直す。そうやって、何とかしてまねの域を脱しようとしていたのだと思います。

何をするにしても、しっかりとした根底を確立することが大事だと思います。

毎年、「SORORI」という自主公演の会を開いており、今年も12月に国立能楽堂で行います。「SORORI」は狂言の「そろり、そろりと参ろう」という言葉から付けましたが、私にとって30代最後なので、「釣狐」を上演します。大藏流には約180曲の狂言がありますが、「釣狐」は180番目に習うといわれるほど難しい。父がこれを上演したのは1回だけですが、私は20代と30代の時に演じているので、今回が3回目になります。

**外川** どういったところが難しいのですか。

**善竹** 前半は、狐師に仲間を殺された狐が人間に化けて登場し、「もう狐はするな」と言いに行くのですが、面を付けて、ちょっと背を丸めて「狐の雰囲気」を出す。後半は狐の着ぐるみを着て、狐として出る。前半の妖艶さと後半のアクロバティックな動き、この両方を演じなくてはいけないのです。

私は普段は体重が100キロ以上あり、「100キロを超えることができるのは才能

である」と言っていますが(笑)、上演のときは減量します。36歳で演じたときは、2カ月で30キロ落としました。

**外川** そんなに。たしかに、善竹さんのウェブサイトに載っている写真は、とてもスリムに写っていましたね。

**善竹** 写真の修正はしていません。トレーニングで毎日2時間、走ったり、食事制限したり。夕食をほとんど抜いたり。**外川** かくれた努力があるんですね。空腹で寝られないということはありませんでしたか。

**善竹** 自分で「空腹で寝る」という言葉を頭の中に書き込むのです。

**外川** 学ばれた心理学の応用でしょうか。ナラティブ・セラピーのようですか。

**善竹** 言葉にすることは大事です。

**日本人の心を表現した狂言は  
見れば必ず理解でき、楽しめる**

**善竹** お客様にお伝えしたいのは、私は一

生、狂言師なので、いつでもご都合のいいときに見に来てください、と。狂言は日本人の心を表現したものであって、見れば必ず理解でき、楽しんでいただけます。少なくとも、私の狂言会はそのようにしているつもりです。「狂言道場」と銘打って、もうすぐ渋谷で開催しますが、会場では私が作ったオリジナルのレジュメを観客の皆さんにあらかじめお配りしておき、上演中には随所で演技を一時停止し、私が解説しながら進んでいくという形をとっています。ですから、私の狂言を見ても分からなかったら、あきらめていただいても結構です。

**外川** これからの目標や希望をお聞かせください。

**善竹** いずれは海外で狂言を上演したいですね。小さい頃は石原裕次郎さんが大好きだったので、石原さんの事務所に入つて役者さんになりたいと思っていました。

**外川** 今からでも、遅くはないと思います。では、海外からオフアアがあつたら、いか

がなさいますか。

**善竹** もちろん、お引き受けします。英語は得意ではありませんが、聞いて覚えます。

**外川** 善竹さんは、狂言もまねて覚えられたのですものね。

**善竹** そうですね。聞いて覚える訓練は、3歳の頃からやっていますから。

**外川** 世界を舞台にしたご活躍、楽しみにしております。本日は、ありがとうございました。



善竹富太郎さん(右)と外川智恵さん  
(2018年8月3日 稽古場にて)